第６回　芥川作品にみるキリスト教　　2019.11.15　篠崎美生子

１．芥川龍之介の「切支丹物」（資料室 p30）

異国情緒に対する関心？

↓　イエズス会の布教時代～禁教時代を舞台にしたものが多数

イエスという人物への関心　cf）「西方の人」「続西方の人」

・「西方の人」

１　この人を見よ

わたしは彼是十年ばかり前に芸術的にクリスト教を――殊にカトリツク教を愛してゐた。長崎の「日本の聖母の寺」は未だに私の記憶に残つてゐる。かう云ふわたしは北原白秋氏や木下杢太郎氏の播いた種をせつせと拾つてゐた鴉に過ぎない。それから又何年か前にはクリスト教の為に殉じたクリスト教徒たちに或興味を感じてゐた。殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のやうに病的な興味を与へたのである。わたしはやつとこの頃になつて四人の伝記作者のわたしたちに伝へたクリストと云ふ人を愛し出した。クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出来ない。

14　聖霊の子供

クリストは古代のジヤアナリストになつた。同時に又古代のボヘミアンになつた。彼の天才は飛躍をつづけ、彼の生活は一時代の社会的約束を踏みにじつた。彼を理解しない弟子たちの中に時々ヒステリイを起しながら。

19　ジヤアナリスト

我々は唯我々自身に近いものの外は見ることは出来ない。少くとも我々に迫つて来るものは我々自身に近いものだけである。クリストはあらゆるジヤアナリストのやうにこの事実を直覚してゐた。花嫁、葡萄園、驢馬、工人――彼の教へは目のあたりにあるものを一度も利用せずにすましたことはない。「善いサマリア人」や「放蕩息子の帰宅」はかう云ふ彼の詩の傑作である。抽象的な言葉ばかり使つてゐる後代のクリスト教的ジヤアナリスト――牧師たちは一度もこのクリストのジヤアナリズムの効果を考へなかつたのであらう。彼は彼等に比べれば勿論、後代のクリストたちに比べても、決して遜色のあるジヤアナリストではない。彼のジヤアナリズムはその為に西方の古典と肩を並べてゐる。彼は実に古い炎に新しい薪を加へるジヤアナリストだつた。

Cf）「文芸的な、余りに文芸的な」（1927）

僕も亦、――僕は或は便宜上のコムミユニストか何かに変るかも知れない。が、本質的にはどこまで行つても、畢竟ジヤアナリスト兼詩人である。（十　厭世主義）

イエスと自分を重ねる（イメージ戦略）？　　35 歳の死／枕もとの聖書

2．「奉教人の死」（1918）の教会批判

・偽書騒動（「資料室」p29）

「鏤刻年月」（二）がありえない？

この物語は「福音伝道」の書と言えるのか？

・本当の原典『聖人伝』〈聖マリナ〉（p26-27）と比較して

cf『サントスの御作業』（日本）

『黄金伝説』（イタリア 13C　ヴォラギネ）の「修道士処女」のうち、死後女性としての身体が発見されて名誉を回復するものは

「79 聖女マリナ」「87 聖女テオドラ」「145 聖女マルガリタ」

① 男装の理由が不明

→ 「それが、何事でござろうぞ。なべて人の世の尊さは、何ものにも替え難い刹那の感動に極るものじゃ。」として不問にされる。

② これは「殉教」なのか？

→ 『黄金伝説』の「殉教」は概ね異教徒による迫害に耐えて命を落としたケース（「修道士処女」話型は特殊だが、代わりに教会による謝罪と列聖がある）

③ 謝罪しない伴天連たち

→ ろうれんぞの死はあくまで「奉教人の死」？（葬儀に言及なし）

④ 冤罪が晴れてから露れる「二つの乳房」

→ 何に対する感動か……宗教的？／エロス的？

ろうれんぞは「まなざしのあでやかなこの国の女」の枠に閉じ込められる」

研究も

ろうれんぞの
しめおんに対する
「恋情」を想像
してあげようとす
る良心的な論文群

資料 a

石割透「「奉教人の死」――語ることと沈黙と」

（『〈芥川〉とよばれた芸術家』有精堂、1992）

「私が悪かつた。許して下されい」。これは、恋情にも似た好意を感じていた異性を前にしてさえ、自己の本体を隠すことを自らに強いた彼女の、精いっぱいの許しの表現であった。

三島譲「「奉教人の死」を読む――〈女〉への帰還の物語――」

（『福岡大学日本語日本文学』1991.9）

ここで伝えられるのは、少なくとも〈ろおらん〉が全く抗弁をしな

かったということ、そしてそうすることによって、恋ゆえに心を狂わせていく〈傘張の娘〉の〈女〉をも背負いつつ、いさぎよく冤罪を引き受けていったということである。それはほかならぬ〈ろおらん〉自信が、狂おしく燃えたたんとする内なる〈女〉を抱え込んでいたためであった。

・「刹那の感動」の欺瞞

① エピグラフとの矛盾

「未来永々の果しなき楽しみ」「不可思議の甘味」……『黄金伝説』の殉教聖人のセリフ

永遠よりも刹那？

（謝罪しない）教会の権威をゆさぶり、自ら「まるちり」認定をする語り手

② 誰の感動か？

資料ｂ

篠崎美生子『弱い「内面」の陥穽――芥川龍之介から見る日本近代文学――』（翰林書房、2017）

ただし、「一」の語りによる教会批判が、「ろおれんぞ」という人物の〈疎外〉によって成り立っていることは見逃せない。臨終の「ろおれんぞ」が「僅に二三度頷いて見せた」こと、「安らかなほゝ笑みを唇に止めた」ことが本当であったとしても、それらを「髪は焼け肌は焦げて、手も足も動かぬ上に、口をきかう気色さへも、今は全く尽きたげ」な「ろおれんぞ」の確かな意思表示とすることはできまい。である以上、**「ろおれんぞ」の行為を「まるちり」と称揚する語りは、むしろ「ろおれんぞ」の「内面」を奪い取って都合よく意味づけるもの**にほかなるまい。

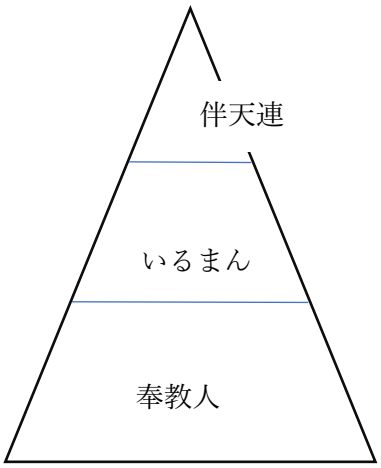
・奪い合う語り――本当の教会批判として有効？

①「少年」：奉教人→いるまん→伴天連へ

「少女」：奉教人

あり得たかもしれないろおれんぞの野心を抑圧

② エロスは『黄金伝説』にもある！

③ 死の意味付け

Cf）永井隆『長崎の鐘』（1949）